

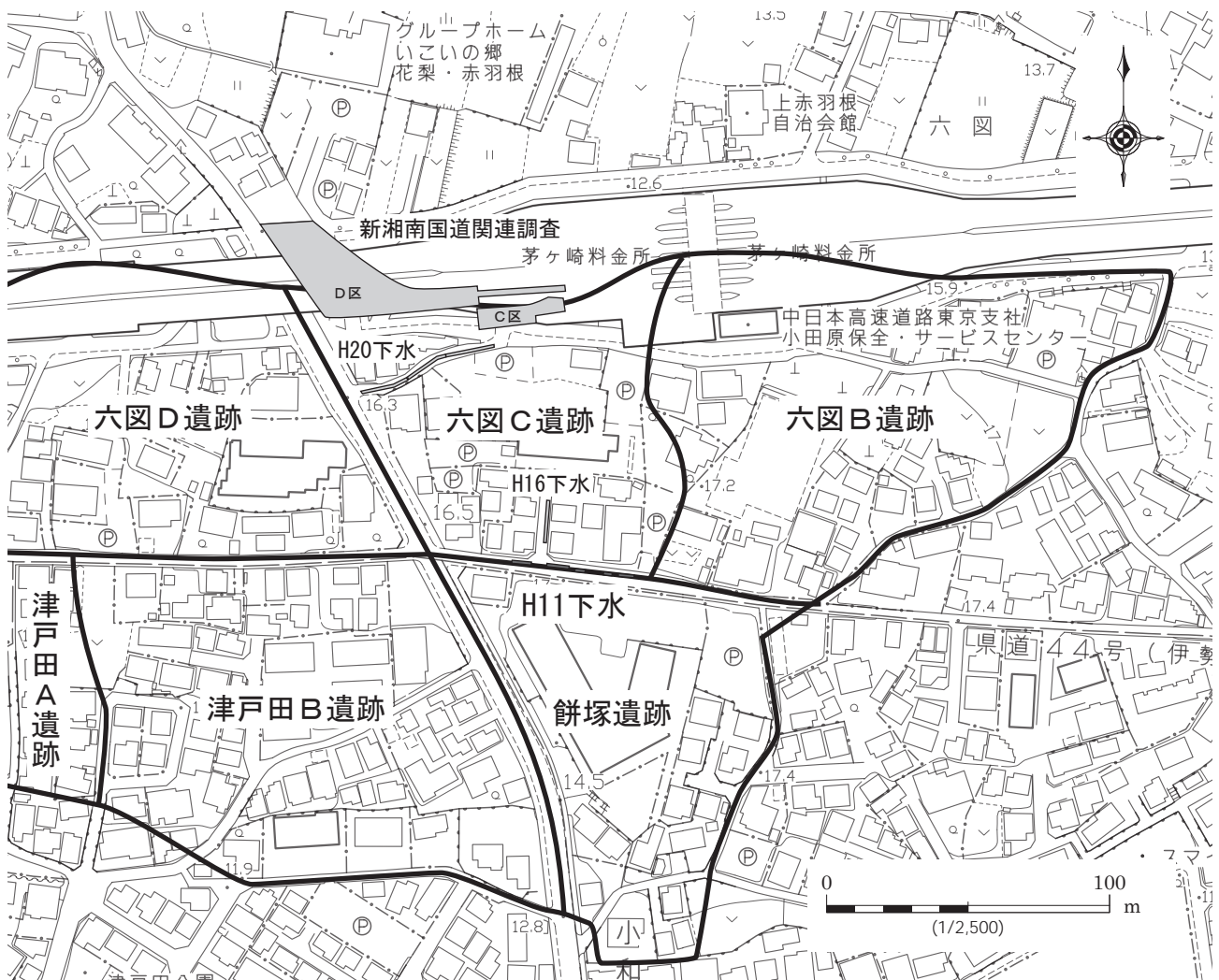
# 第Ⅷ章 赤羽根 六図C遺跡

## 第1節 調査の概要

### 第1項 六図C遺跡の概要 (第83図、第38表)

これまで本格調査が1回と公共下水道布設工事に伴う発掘調査が3箇年度行われている。調査地点は遺跡範囲の全体に分布しており、遺構・遺物の出土量は少ないものの中世から近世にかけての遺構が確認されている。

第1次調査地点は遺跡北端部に位置しており、国道一号新湘南バイパスに関連した調査である。昭和57年11月18日～昭和58年3月20日の期間で実施された新湘南国道No.2地点第1次調査であり、C・D区の一部が本遺跡範囲内に位置している。北へ下降傾斜する砂丘間凹地の斜面に立地しており、堆積土は腐植土を多く含む低湿地的特徴を有していた。長期間に渡り水田としての土地利用がされていた痕跡が確認さ



第83図 調査地点位置図 (S=1/2,500)

れている。

公共下水道布設に関連する遺跡調査は遺跡範囲の全域に分布している。近世に削平を受けている地点が多く、旧大山街道と推測される重層する硬化面など中世以降の遺構が主体である。ただし、古代に属する遺物も包含層中から出土しており、中世以前の遺構も存在していたものと推測される。

平成 16 年度の調査地点は遺跡の中央部南側に位置している。地表下 1 m 付近まで近現代の造成に伴う攪乱であった。部分的に古代の包含層が残存していたが、遺構・遺物の出土はなかった(宮下 2016)。

平成 20 年度の調査地点は遺跡の中央部北側に位置する。平成 16 年度調査と同様に地表下 1 m 付近までは近現代の攪乱であったが、直下で土坑やピットを確認している。ピットは集中して確認されたが、建物址を推定するには至らなかった。また、古代～近世までの遺物が出土している(伊藤 2015)。

第 38 表 調査地点一覧表

次数	調査年月日	面積 (㎡)	主な遺構と遺物	文献
	調査組織			
六図C 遺跡 1次	昭和57(1982)年12月1日 ～ 昭和58(1983)年3月20日	約 2,000	集落址関連遺構・遺物	1
	新湘南国道埋蔵文化財調査会			
六図C 遺跡 H11下水	平成11(1999)年6月15日 ～ 6月17日	28.5	古墳～古代：土師器 古代：須恵器 中世：陶器 中近世：道状遺構 5 条 礫、炭化物 近世：溝状遺構 1 条、ピット 1 穴 鉄製品(銭貨)	本書
	財団法人茅ヶ崎市文化振興財団			
六図C 遺跡 H16下水	平成12(2000)年7月27日 ～ 7月28日	20.0	遺構・遺物なし	2
	財団法人茅ヶ崎市文化振興財団			
六図C 遺跡 H20下水	平成20(2008)年7月22日 ～ 7月24日	50.0	古代：ピット 3 穴 土師器、須恵器 近世：土坑 2 基 陶磁器	3
	財団法人茅ヶ崎市文化振興財団			

#### 引用・参考文献

- 岡本勇・富永富士雄・大村浩司 1985『新湘南国道埋蔵文化財調査報告』新湘南国道埋蔵文化財調査会
- 宮下秀之 2016『公共下水道布設関連調査 平成 16 年度発掘調査』  
茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団調査報告 51 公益財団法人茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団
- 伊藤俊一 2015『公共下水道布設関連調査 平成 20 年度・25 年度・29 年度発掘調査』  
茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団調査報告 49 公益財団法人茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団
- 田中万智 2021『公共下水道布設関連遺跡調査報告Ⅰ 平成 13 (2021) 年度発掘調査』  
茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告 58 茅ヶ崎市教育委員会

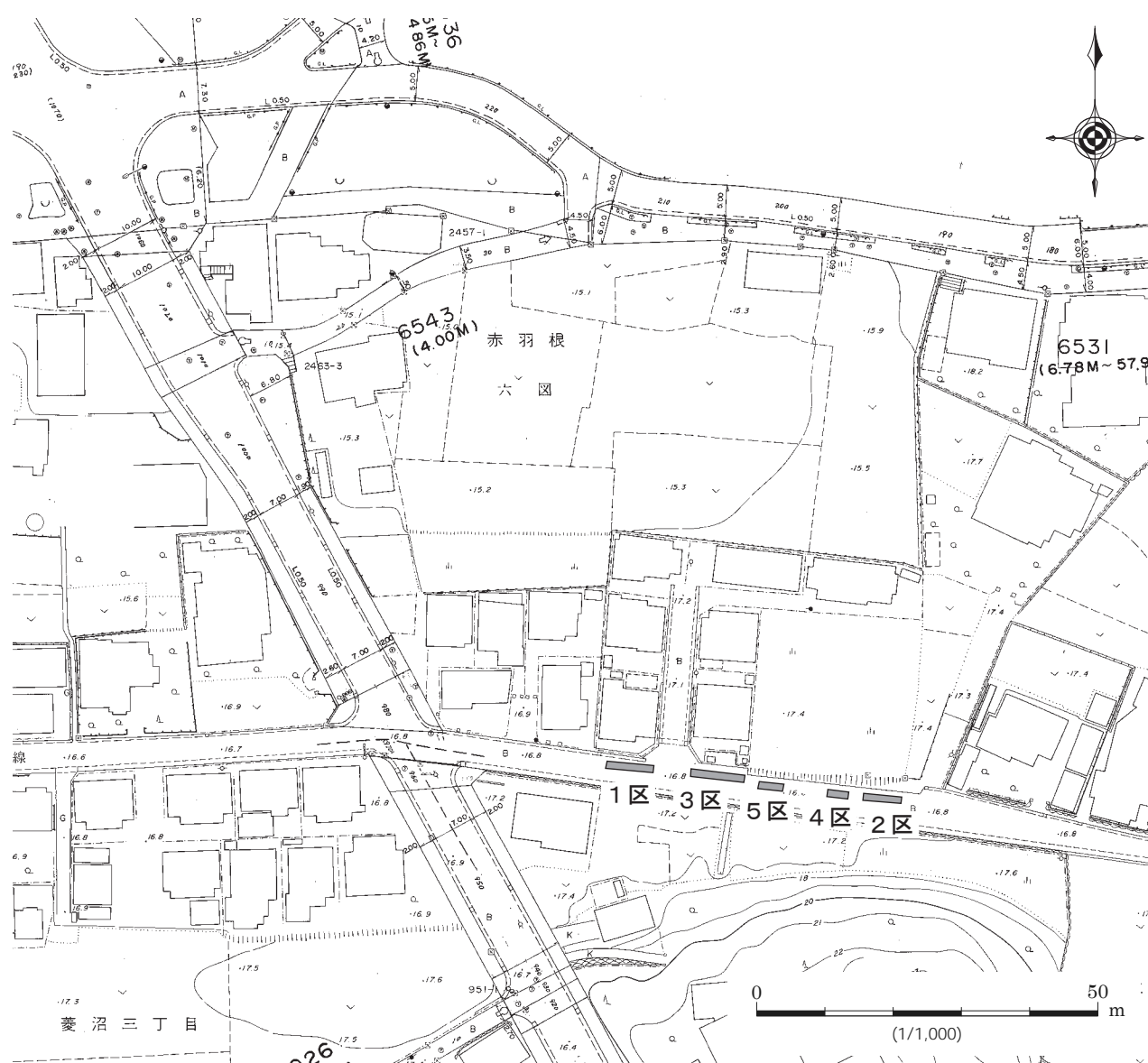
## 第2項 調査の方法と経過 (第84図)

本調査は平成11年度の公共下水道布設工事に伴うものであった。

調査区は計5区を数えた。また、総延長距離は27.1mに達し、総調査面積は28.5㎡であった。

調査方法は布掘り調査を実施し、平板測量による記録保存と随時写真撮影を行った。

現地調査は6月15日に1区を開始し、6月17日に5区を調査して終了した。なお、調査地点の市道は生活道路であり交通量も多いことから即日復旧を原則とした。また、道路の利用事情により一部調査区の順番を入れ替えて調査を実施した。

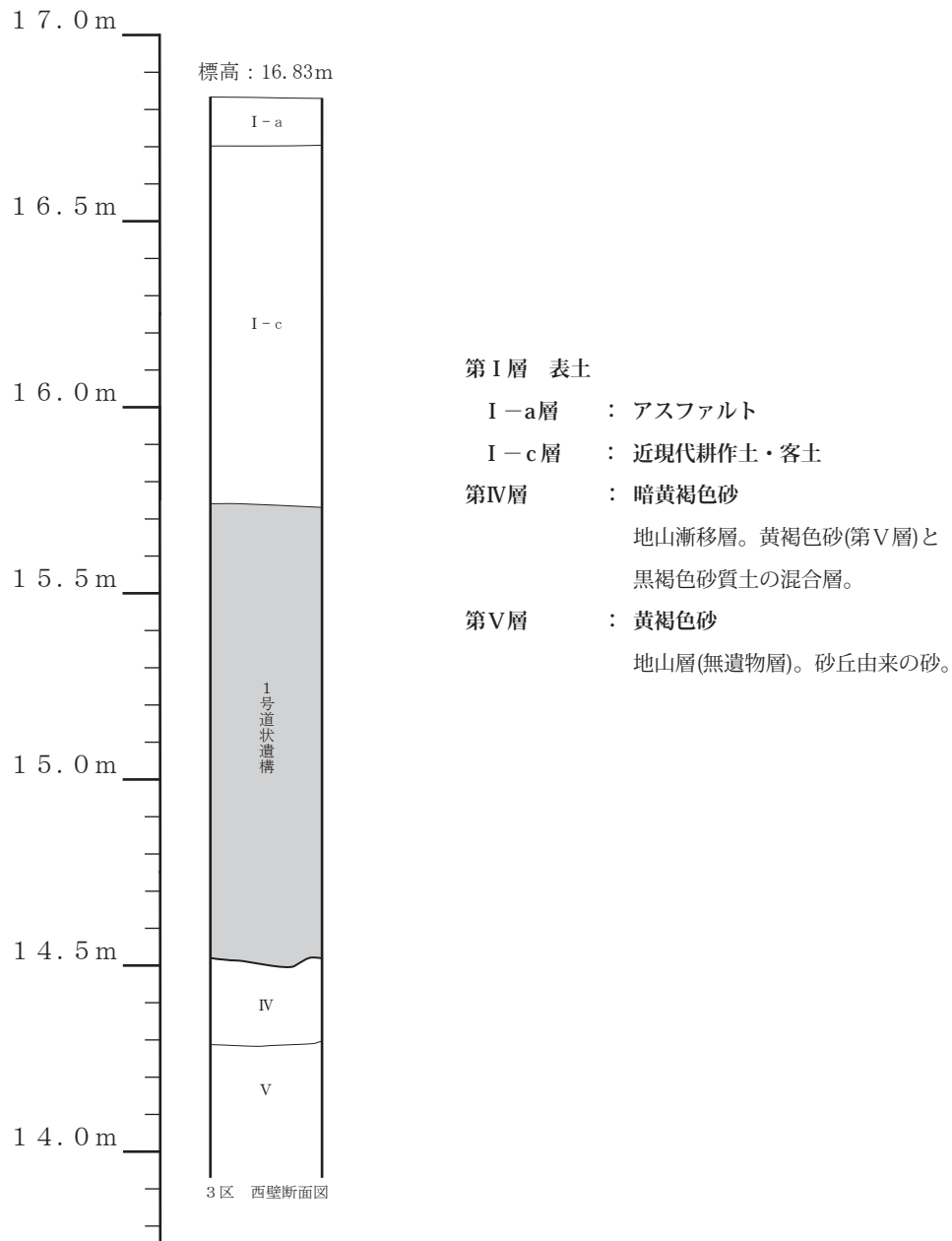


第84図 調査区位置図 (S=1/1,000)

第3項 基本土層 (第85図)

本調査地点の現況は舗装されており、県道44号(伊勢原藤沢線)として使用されていた。現標高は2区(17.00 m)から西に位置する3区(16.84 m)に向かい、わずかに下降傾斜している。

本遺跡は砂丘から砂丘間凹地へ下る北斜面に位置しており、堆積土は砂質土および砂が主体である。ただし、標高が下がるにつれて土中に含まれる腐植物の量が多くなるなど、低湿地の特徴を示している。今回の調査区は、いずれも地表下1 m付近まで近現代の耕作土・客土であり、直下には宝永パミス・スコリアを含む中世～近世にかけての道状遺構が確認された。



第85図 基本土層図 (S=1/20)



## 第2節 発見された遺構

### 1区 (第86図、図版27)

遺跡の南辺部に位置する。調査区の延長距離は6.9 mで、西から東方向へ掘削した。既設埋設管の掘り込みが多いが、部分的に硬化面が確認された。硬化面は何層にも重なっており、最上位は宝永パミス・スコリアを含む近世前半以降のものであった。調査区全域で確認されており、1号道状遺構とした。覆土の特徴から中近世の遺構であると推測される。

### 2区 (第86・88図、図版27)

4区の東側約2 mの地点に位置する。調査区の延長距離は5.6 mで西から東方向へ掘削した。調査区全域で1号道状遺構を、中央部で1号溝状遺構を、東端部で1号ピットを確認した。

1号道状遺構は調査区の全域で確認された。覆土の堆積状況は他の調査区と共通しており、複数層の硬化面が存在している。覆土の特徴から中近世の遺構であると推測される。

1号溝状遺構は調査区の中央部を東西に縦断し、調査区と同軸方向に延長する。確認された規模は距離4.16 m、幅0.9 m、深さ0.34 mを測り、断面形状は椀型を呈する。覆土中に宝永パミス・スコリアを含み、1号道状遺構を掘り込み構築されている。覆土中に宝永パミス・スコリアを含むことから近世前半以降の遺構であると推測される。掘り込みが浅いことから畝状遺構の可能性も考えられる。

1号ピットの残存規模は長径0.32 m、短径0.19 m、深さ0.37 mを測る。1号道状遺構を掘り込み構築されており、遺構の東半部は調査区外である。覆土中に宝永パミス・スコリアを含むことから、近世前半以降の遺構であると推測される。

### 3区 (第87・88図、図版28)

1区の東側約6 mの地点に位置する。調査区の延長距離は7.9 mで、西から東方向に掘削した。全域で1号道状遺構を確認した。

1号道状遺構は近現代の耕作土・客土直下から地山層であるV層直上まで計6層の硬化面が確認された。1～3層までは宝永パミス・スコリアが含まれているが、以下の4～21層には含まれない。また、13～15層はブロック状の硬化面であり、道状遺構の同一面が崩壊したものと推測される。中近世の遺構であると推測される。

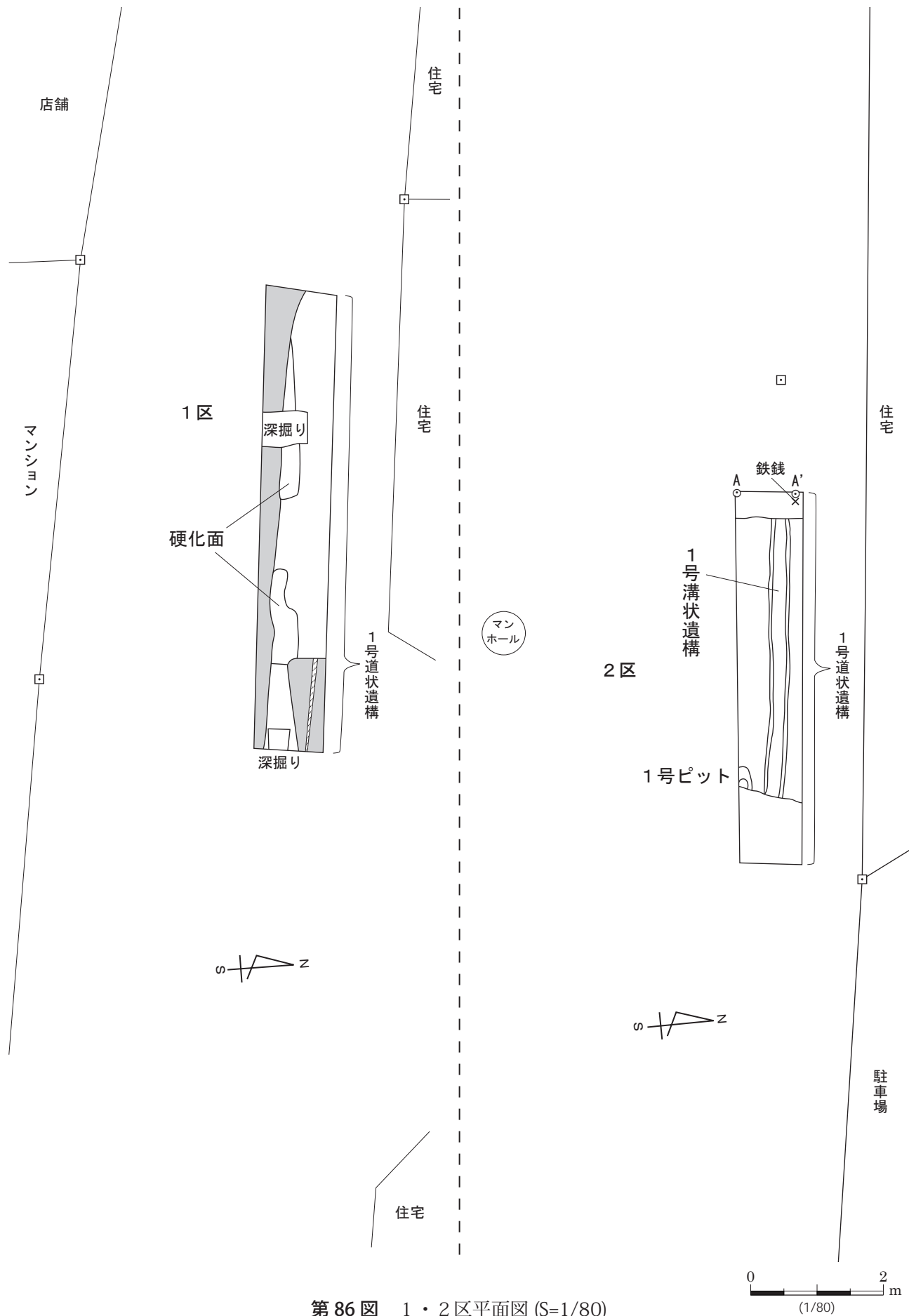
### 4区 (第87・88図、図版29)

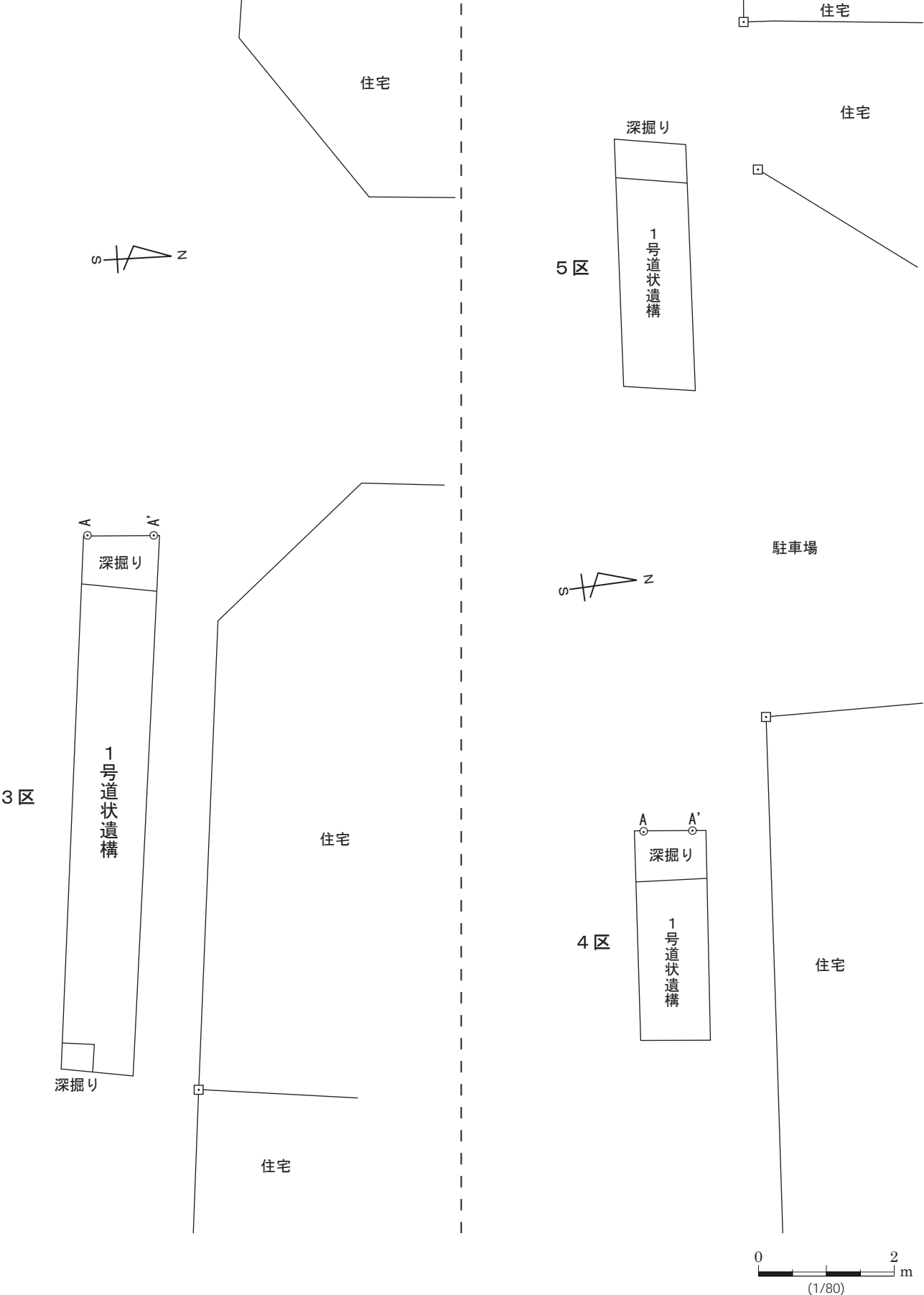
2区の西側約2 mの地点に位置する。調査区の延長距離は3.1 mで、西から東方向に掘削した。全域で1号道状遺構を確認した。

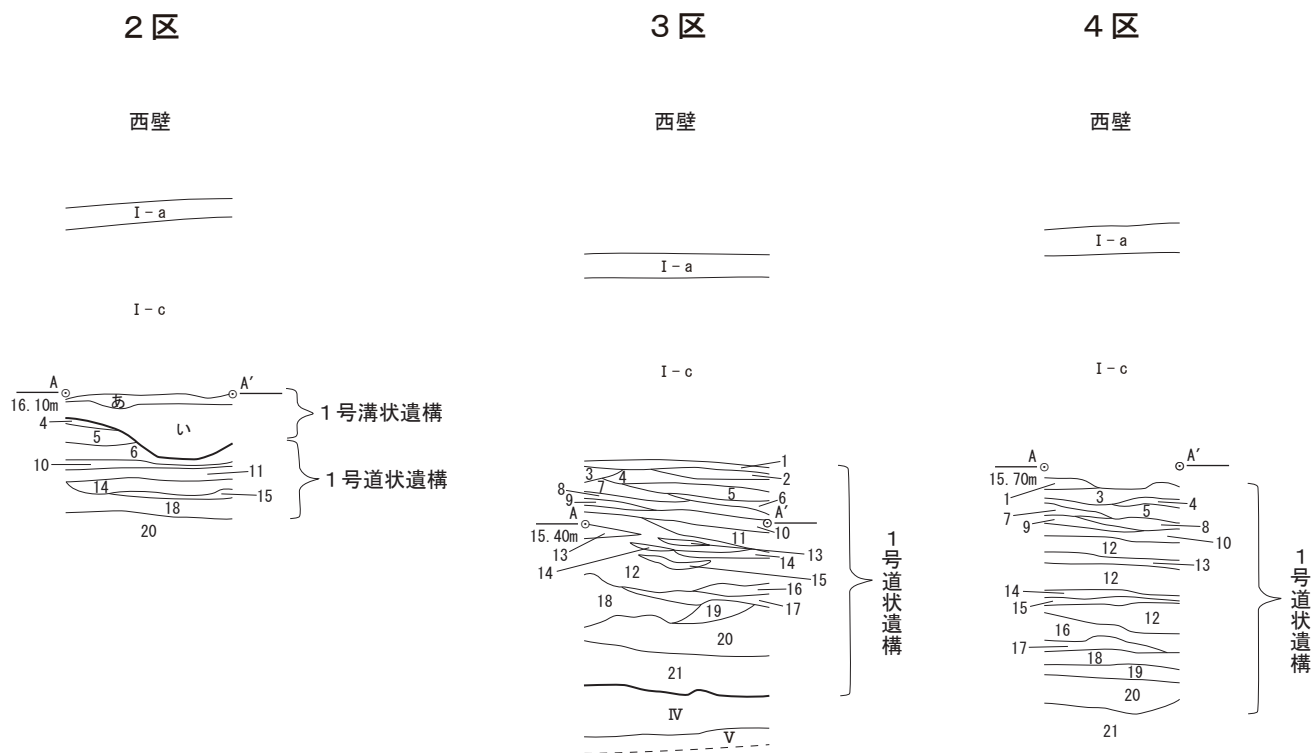
1号道状遺構の覆土堆積状況は2・3区と共通しており、複数層の硬化面を確認している。覆土中層から須恵器片が出土しているが、遺構の年代と合わないことから、他所からの流れ込みと推測される。

### 5区 (第87図、図版29)

3区の東側約2 mの地点に位置する。調査区の延長距離は3.6 mで、西から東方向に掘削した。他の調査区と同様に全域で1号道状遺構を確認した。







【1号道状遺構】

第1層 : 暗褐色砂質土  
第2層 : 黒褐色砂質土  
第3層 : 暗褐色砂質土  
第4層 : 黒褐色砂質土

第5層 : 黒褐色砂質土  
第6層 : 黒褐色砂質土  
第7層 : 黒褐色砂質土  
第8層 : 黒褐色砂質土  
第9層 : 黒褐色砂質土  
第10層 : 黒褐色砂質土  
第11層 : 黒褐色砂質土  
第12層 : 黒褐色砂質土  
第13層 : 黒褐色土  
第14層 : 黒褐色土  
第15層 : 黒褐色砂質土  
第16層 : 黒褐色砂質土  
第17層 : 黒褐色砂質土  
第18層 : 黒褐色砂質土  
第19層 : 黒褐色砂質土  
第20層 : 黒褐色砂質土  
第21層 : 黒褐色砂質土

【1号溝状遺構】

第a層 : 暗褐灰色砂質土  
第i層 : 暗褐灰色砂質土

しまりあり。粘性なし。宝永パミス・スコリアを少量含む。硬化している。第一硬化面。  
宝永パミス・スコリア層。スコリア主体。  
しまり弱い。粘性なし。宝永パミス・スコリアを少量含む。色調やや明るい。  
しまりあり。砂質味強い。橙色スコリアを極少量含む。炭化物を極少量含む。上面が著しく硬化する。第二硬化面。  
しまりあり。堆積密。橙色スコリアを極少量含む。  
砂質味やや弱い。部分的に硬化する。橙色スコリアを極少量含む。第三硬化面。  
第5層土に類似し、しまり減る。小礫（径1～2mm）をやや多く含む。橙色スコリアを含む。  
しまりあり。堆積やや密。土粒細かい。部分的に硬化する。第四硬化面。  
しまり弱い。色調やや暗い。土粒細かい。  
しまり弱い。土粒細かい。  
砂質味弱い。橙色スコリアを少量含む。色調暗い。  
しまりなし。粘性ややあり。橙色スコリアを極少量含む。暗褐色土を斑に含む。  
色調やや暗い。部分的に硬化する。第五硬化面。  
しまりあり。橙色スコリアを少量含む。硬化している。第五硬化面。  
第13層土に比べ色調暗く、第14層土より明るい。部分的に硬化する。第五硬化面。  
第12層土に類似するが、暗褐色土の混入量が多い。  
しまり弱い。橙色スコリア・黒色スコリアを少量含む。部分的に硬化する。第六硬化面。  
第12層土に類似し、色調暗い。小礫を多く含む。黒色スコリア（径5～7mm）を少量含む。  
色調やや明るい。砂質味強い。土粒細かい。  
第18・19層土に比べ、色調暗い。粘性ややあり。しまり弱い。黒褐色土を斑に混入する。  
しまり強い。上部がやや硬化する。橙色スコリアを多く、黒色スコリアを少量含む。

0 1 m  
(1/40)

第 88 図 2～4区断面図 (S=1/40)

第3節 発見された遺物

出土遺物は収納箱にして0.5箱分であった。総量は土師器（古墳～古代）4片19.4g、須恵器（古代）1片10.5g、陶器（中世）1片16.6g、鉄製品（近世：銭貨）1点4.3g、礫4点434.9g、炭化物3点5.2gである。中世から近世にかけての道状遺構からの出土が主体であったが、残存状態の悪い遺物が多かった。このうち、1点を図示した。

2区（第89図、第39～41表）

1は1号溝状遺構から出土した鉄銭である。錆が著しく、文字の判読は不可能であった。覆土中に宝永パミス・スコリアを含む遺構から出土していることを考慮すると、近世の遺物であると推測される。



第89図 2区出土遺物 (S = 1/1)

第39表 2区出土遺物観察表

No.	器種	出土位置	法量・観察
1	鉄製品 銭貨	1号溝状遺構	外径: 2.5cm 重量: 4.3g 残存: 完形 書体: — 読み方: — 遺存状態: 不良 備考: 錆が著しく判読不可能

第40表 出土遺物一覧表

調査区	遺構名称	出土遺物
2区	1号溝状遺構	鉄製品（近世：銭貨）1点4.3g
3区	1号道状遺構	土師器（古墳～古代）1片17.0g
4区	1号道状遺構	土師器（古墳～古代）1片.01g、須恵器（古代）1片10.5g、礫2点194.2g、炭化物3点5.2g
5区	1号道状遺構	土師器（古墳～古代）2片2.3g、陶器（中世：常滑窯系）1片16.6g、礫2点240.7g

第41表 出土遺物集計表

出土遺物	片数	重量 (g)	出土遺物	片数	重量 (g)
土師器（古墳～古代）	4	19.4	鉄製品（近世：銭貨）	1	4.3
須恵器（古代）	1	10.5	礫	4	434.9
陶器（中世）	1	16.6	炭化物	3	5.2

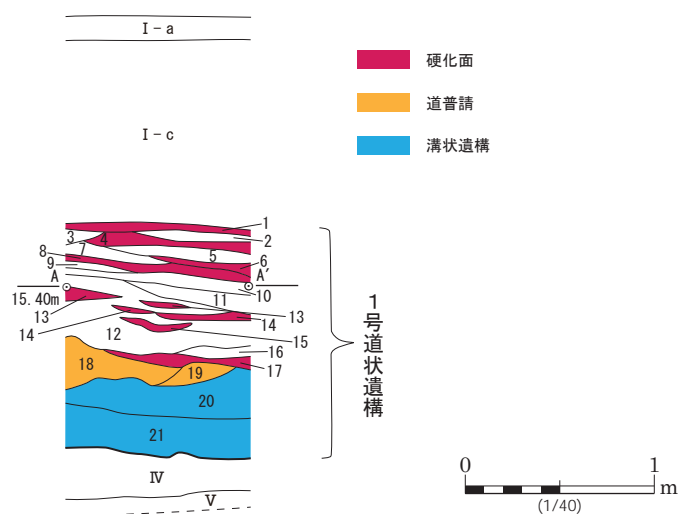


## 第4節 まとめ (第90・91図)

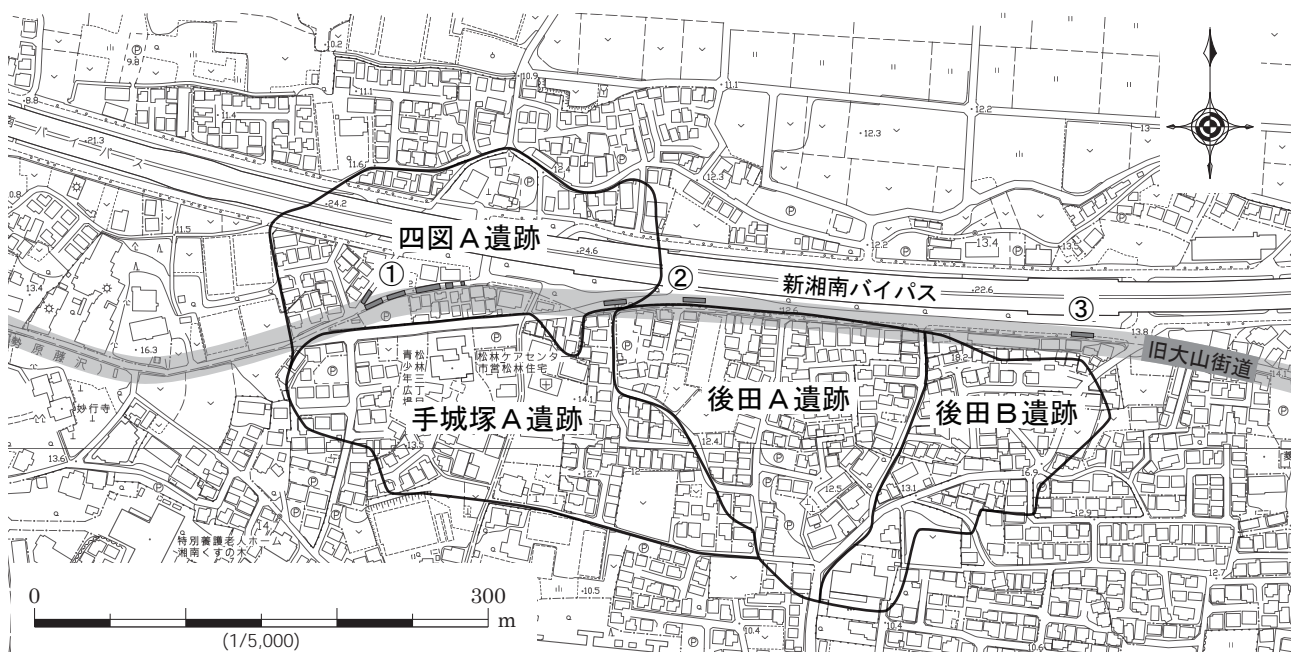
今回の調査では、中世から近世にかけての道状遺構が全域で確認された。道状遺構の硬化面は少なくとも6層確認でき、遺構覆土中の火山灰包含状況からは中世以降、連綿として「道」が機能していたことが窺われる。

今回の調査地点であり、本遺跡の南辺部を東西方向に走る県道44号は旧大山街道と推測されている地点である。調査成果からは、無遺物の地山漸移層であるⅣ層を掘り込む溝状遺構と推測される遺構覆土（第20・21層）がある程度埋没した段階で、第18・19層土により路面を平坦に道普請したものと推測される。その後は使用（硬化した面＝断面図赤色）と道普請を繰り返して、現在はアスファルト舗装の県道44号になったものと考えられる。同様の状況は隣接する県道44号で実施された公共下水道布設関連調査でも確認されていることから、旧大山街道の位置は概ね県道44号と重なるといえよう（田中 2021）。

3区 西壁



第90図 3区色分け断面図 (S=1/40)



第91図 隣接遺跡での旧大山街道分布状況 (S=1/5,000)